

記る登に岳井天大及岳燕

も、屏風立ちの岩壁である、そして、谷を隔てた穂
高山と、槍ヶ岳とが、我が隣の御天上と、地上にあ
つては三つ鼎に立脚し、天界にあつては三つ星
の如く閃めいてゐる。

絶壁の上に佇んで、東を望めば、蜻蛉の羽のや
うに透はつた薄い雲が、ひた寄せてゐる、紅日は
槍ヶ岳の上を、一面火のやうに焼け爛らしてゐ
る、真面に見てゐると、眩ゆるくなるので、顔を反け

記る登に岳井天大及岳燕

る、何とも知れぬ黒い幻が、空を駆けて行くのが、
やがて小さい輪のやうに、眼の前を伸びつ屈み
つして、廻轉して消え失せるころ、平生の眼にか
へる、夕の日は飛驒の山を越え、加賀の山を越え、
遙かの西へ輾じてゆくのであらう、御天上の岩
は、てかくと金のやうに燃えはじめ、偃松も
その迸りを受けて、金茶色になつた。

明星が穂高の肩を、弓杖ほど離れた上に光つ

記る登に岳井天大及岳燕

てゐる。萬里水の如き玻璃盤に銀紙を丁と一つ
打ち込んだ。

矢津昌永氏の『日本地文學』第九版に

信飛の境に沿ふて槍ヶ岳（一萬一千六百五十二尺）穂高山（一萬

一千五百四十三尺）大天上岳（一萬四百八十尺）常念岳（一萬五

百十一尺）蝶岳（八千八百四尺）硫黄岳（六千七百七十五尺）

等の隆峯競立して本邦中最高の連峯なり

とあれど、槍ヶ岳と硫黄岳とを除いて、他は信州の地籍に屬するのみ、
飛騨の境上に立たず、それはともかく、この中にて大天上岳の所在詳
ならず、余には久しく疑問として存したりし、余が、本文の旅行は、

記る登に岳井天大及岳燕

この山脈を跋渉したるものなるが、大天上岳の所在を、導者をはじめ、
何人に問ふも知るものなく、上高地温泉に下り、又實すにこの事を
以てしたるも、同じく要領を得ず、穂高岳に上らむとして履ひたる余
の、新らしき導者曰く、槍ヶ岳登山の外人、亦頗に地圖を按して、大
天上岳なるものの所在を問はる、しかして何人も明らかにかゝる山岳
の存在の有無をすら、知るものなしと。

大天上岳は、實に余のみならず、登山家のために、一箇の謎なりしなり。
然るに、余が本文の御天上に登りてより約、二十日ばかりにして、『日
本山岳志』の撰者高頭式氏、『やま』の著者、志村烏嶺氏、共に又中房
温泉よりこの山に登られ、御天上は則ち地理書にいふ大天上岳、或は

記る登に岳井天大及岳燕

大天井岳なりと判断せられたり。

高頭氏が余に答へられたる書狀に曰く、

大天井に就いての御疑問は、御尤と存し候、元來同山は、農商務省豫察四十萬分一圖と、十萬分一地性圖に記載されたれとも、信濃出版の十萬分一圖には、單に米突のみ記され、大天井の名無之候、小子は中房温泉より、一萬尺ありと解せらるゝ燕岳に上り、峯つゞきにて此山に上り候、西穂高にては、テンシヤウ岳と申居候、然れ共、小子が烏川村役場へ照會せし書狀の返辭には、單に大天井、常念、蝶の三岳へは當村より登路あり、云々と記されたり、因つて想ふ、此山は烏川方面より、大天井と申し、西穂高

方面にては、テンシヤウと申すに無之候哉、小子は只西穂高より登り候て、テンシヤウと申候故、大天井ならむと(其位置より推測して)申上候なり。

と圖を添へられたるを見るに、御天上岳則大天井なること、疑を容れざる如し。

おもふに、後年日本アルプスの調査、次第に歩を進め圖籍又備はり、登山客の群到すること、猶今日の不二御嶽に於けるが如くなりたるとき、本文を讀んで、大天上岳の如き該山脈中主要なる大山岳の所在さへ、審にすること能はざりし迂濶を憫れむものあるべし、おもひでのためにとて、かくは記しぬ。

記る登に岳井天大及岳燕

奥常念岳の絶巖に立つ記

泊まつたのは、二の俣の小舎である。
頭の上は大空で、否大空の中に、粗削りの石の塊
が挟まれてゐて、その塊を土臺として、蒲鉾形の
蓆小舎が出来てゐる。立ては頭が支える横にな
つても、足を樂々延ばせない、萬里見透しの大虚
空の中で、こんな見そぼらしい小舎を作つて、人
間は、その中に囚はれてゐなければならぬ。

外には夜に入ると、深沈たる高山の常大風が吼
けつて、瓦落瓦落いふ、樺の皮屋根の重量の石が
吹き上げられて、一萬尺も飛ぶかとおもふのに、
小舎の中は、空氣までが寝入つてゐる。
自分は今まで、富士山や木曾の御岳の、頂上の
小舎に寝泊まりしたし、或は谷間に近く石の枕
で野宿をしたことは幾度もあつたが、實は今夜
ほど、氣味の好く無かつたことはない、自分は一

人である、この狭い小舎の中、といふよりも天外に奔放する一不可思議線のアルプスに、人類として、自分と導者の善作と、只つた二人が存在するばかりだ、此二人は生れてから、昨日までの長い年月に、互に顔も知らねば名も知らぬ人々である、しかして二人が呼吸のある屍骸を抱き合はないばかりに横へてゐるところは、高く人寰を絶し、近く天球を磨する雲の表の、一片の固

形塊で、槍ヶ岳は背後より、穂高山は足の方より、大天井岳は頭を壓すばかりに、儼然と聳立して、威嚇をしてゐる、僅に其一個を存するとも、猶以て弱さを壓伏するに足るのに、こゝに三個を並存してゐる。
自分が少くとも、此一夜に於て、何よりも、誰よりも、最も親しむべき保護者として頼める善作は、呼吸を窒められたかと疑ふばかりに、安々と

記つ立に巔絶の岳念常奥

寝てゐる、我と彼とは隣り合つてゐるといふだ
けで、自分の心中の恐怖は彼の冷然化石の如き
不可導熱體に波及しないから、二人の間は全然
没交渉である、『無邪氣は強し』とはワ
ズワース詩中の一句である、彼の恭謙なる昨夜
までは、自分に事ふること、主従の如くであつた
が、こゝに至つて無邪氣なる彼は、いつの間にか
自分の生命から二番目の赤毛布——山中唯一

記つ立に巔絶の岳念常奥

の防寒具——を奪つて、スツポリ頭から冠つて
快く寝てゐる、自分も寒いから、瘦腕の力限りに、
毛布の端を引ッ張つてみたが、びくとも動かな
い、寒氣は彼をして、眞個の正直者となさざれば
止まなかつたのである。
併し流石に敲き起して、毛布を奪ひ返へすま
で、自分も従容と寝てはゐられないのである、
石で風を抑へた戸帳代りの蓆一枚が捲くられ

もしないのに、自分の枕許に、どこよりともなく、影の如く、幻の如く、近づくものがある、足音を偷でも或る物は、無き物よりも、隠然たる權威を挟んで豫じめ一種の警告を與へるものである、彼は忍びて先づ、自分たちが生きてゐるのか、死んでゐるのかを試んとする如く、つくねんと佇んで覗つてゐる、天地皆死んだとき、宇宙は星の外に皆吹き拂はれて、空洞になつてしまつたとき、

自分の眼は冴え冴えしくなり、耳まで鞆を拂つた刀身の如く、銳利になつて、觸るれば手應へあらんずるとき、幻は微小なる黒體となつて、逸の如く獨樂の如くに來た、この黒體が只一つ動くために、小舎の中に靜肅に壓伏されてゐる空氣までが、それに伴つて活きて來た、自分は晝の疲勞も失せてしまひ、俄破と頭を擡げると、黒體の小動物はコト／＼と音をさせて、石の穴につい

奥常念岳の絶巖に立つ記

と這べり込んだ裾を引いて取つたやうに。
外へ出て見ると、月は高い、槍ヶ岳は大海から
頭をのそりと出す、鳥帽子岩のやうで、雪の白條
は岩の上へ鷗が糞を落したやうだ、自分は恍惚
として、今山の巖に立つてゐるのか、波の寄る渚
を歩いてゐるのかと、惑つた、夜の自然は、一切を
平等にして、山とか海とかに、假現する異性を失
はせる。

奥常念岳の絶巖に立つ記

足の下、一面は雲の波で、月があつても、凸面に
氷を張り詰めて、下界を固く封鎖して了つた、こ
の下に都府あり、簇々たる人家あり、男女あり、社
會あり、好悪あり、號泣放笑ありといつても、これ
は黎明が来るまでは存在しない世界である、仰
げば星は快樂の象表、月は光明の窓、わが小舎に
トロく、燃え残つてゐる焚火のみが、人の手に
成つた唯一の活動——これも事業なり——を

示すのを外にして、天下の人類と、その作れるものは悉く廢滅し了んぬ。

風が寒くて、皮下まで冷たいものを注射されるやうだ、そのたびに身の毛が慄つ、再び小舎に戻る。まどろむこと一瞬間、焚火も全く消えた、一個の逞ましい木像と、一個の冷たい大理石像と、小舎の中に横はる、一は依然として動かないのに、一は蠢めいて待つものあり。

待ちに待つた朝は来た、朝がいかなる方面から、いかに忍び足に寄つて来て、一秒づゝ額を白くしたかは徹夜凝視しても解らない、夜と朝の筋目が判然と目立つほどなら、地球の緯度線が草鞋の爪先に引つかゝるわけである、しかも争ふ可らざるは朝の神秘なり、一たび臨むとき、木偶には魂を、大理石には血を與る。

いぎたなく眠れる善作を揺り起して、炊事を

奥常念岳の絶嶺に立つ記

命じ、自分一人寒氣に慄えながら小舎の前の石峰に立た。

再び言ふ、脚下は雲なりと一望茫として北氷洋が凝つたやうに雲は硬く結んでゐる、東方甲斐の白峰を先頭とせる赤石山系のみは、水の中に潜むでもゐるやうに、藍を潮した、我が一脈の日本アルプスは、一旦五六岳邊から、洞を波の中に没してしまつたが、やがて立山となつて首を

奥常念岳の絶嶺に立つ記

躍出してゐる、と見るとき、海の底から煥發した朱樺色の火が、一文字を曳て走つた。

日は未だ昇らない、夜中に高かつた銀の月は、槍ヶ岳と穂高山の中間に、淡くかかつてゐる、その脚下の鐵壁の雪田のみが、やはり白い。どこかで、タケガラスが啼いてゐる。

朱樺の火は、燃え出した、その明るくなることは、花が發くのと同じで、萬象の色が眞の瞬間に

改まる、槍と穂高と、兀々とした巉岩が、先づ淨い天
火に洗はれて容を改めた、自分の踏んでゐる脚
の下の石楠花や偃松や、白樺の稚いのが、今眠か
ら醒めたといふやうに朝風に身振ひしてソヨ
くと顛つた、天地皆新しい。

朱樺は黄金色とかはる。

桔梗色に濃かつた木曾御嶽の頭に、朝光が這
ふと微明として、半熱半冷、半紅半紫を混せて、刷

く、自分は思つた、宇宙間、山を待つてはじめて啓
示される秘色はこれであると、噫、何ぞ紫の筑波
を説かむ。

天は愈よ明るい、氷の海は一層の白を加ふる
と共に、一分の硬味を減じて來た雪になつたの
である、玉屑累々ともいふべき空に懸れる雪の
大路を無形の手で、樞を縦横に搔き廻しはじめ
たと見え、捏ね返へした痕跡が割れ目を生じた

ころは、雪は一方に堆く盛り上られ、一方では掬はれたやうにげつそりと凹む。

時に四時四十七分、東方より金芒爛として飛ぶ、槍も穂高も、半肩以上は微黄となり、以下は大天井岳をはじめ、その一帯山脈の影が、かぶさるので闇い衣を被てゐる、日の昇るに伴れて、附近の大山岳、幾百の頭臚皆起つて舞ふ。

風起る、駈け戻つて朝飯を済まし、善作が後始

末をしてゐる間、一足先へ出立する、奥常念に向はうとて。

八月の炎天といふのに、黒羅紗の外套を衣る、毛糸の襟巻をする、革の手袋をはめる、かくして岩頭に金剛杖をアツ立て、日の出の大觀を眺めてゐた。

善作が来ない、あまり長いから一二町戻つて見たが影も形もない、小舎まで歸つてみると、生

頂面な、彼は中を片附けて、蓆の戸帳まで、叮嚀に
卸してあるが、本人はどこにも見えない、自分を
置去りにしたのではなからうが、山路は此邊の
諺にも一分八間といつて、足の爪先の向けやう
で、同じ頂から別れて、反対の方角に行ことにな
る、自分は路を迷つたのである、

大吉の山中へ、一人遺されたかと思ふと、雲の
上にも漂泊の運命が、轟々と身に迫つて來るの

を感じ、聲を限りに叫んだが、反響は岩の空洞
より、オーイと返すのみ、自分は友を呼ぶ、反響は
自分を冷嘲する、寥廓無邊の天の一角を彷徨ふ
て、何處に自分は適歸するのであらう、昨日來た
路は、記憶してゐる、引き返へして中房温泉に戻
れば、最も安全である、併し自分は奥常念を超え
蝶ヶ岳から神河内へ下りてみたい、路を迷つて、
幾日も山谷の間を往來するのは、いゝとしても、

食糧品一切は善作が荷つて去つた、これには弱
る、又思ひ返へして、自分が先方を捜してゐる通
り、先方でも自分を呼んでゐるに違ひない行け
々々と決心した。

今は足許に岩桔梗が美しく咲いてゐても、
眼に入らない、山の西の端まで疾歩すると、その
崖の盡きた下遙かに善作が空身で立つてゐる、
手真似で下りろといふ、崖が急で下りられない、

指す方に従つて漸く下り場所をさがし、偃松の
中に轉げこむと、荷梯子がそつくり寝てゐた、彼
も喉のついく限り呼んだといふ、自分も叫んだ、
相顧みて破顔一笑した。

その崖を下り切ると、白い小山を蜿ねらした
雪田が三稜角形に、篋で均らされたやうになつ
て、五六町もついでゐる、自分が従來見た雪田
といふのは、多少の凸凹があるにしても、平面か

斜面になつてゐるのにこの雪田は殆んど立體になつて、狭い代りに厚味がある、北風で崖へ崖へと吹き寄せられ、寄り寄りつて尖立したまゝ、凝つて雪山となつたのであらう、月影を浴び、花影(高山植物の)を印する萬古の雪も、幾回か人の影が落ちたかは、疑問である、げに不斷の冬は、山の一角に結象して、寂寥の姿をこゝに寐かしてゐる。

面前には横尾鳥の三大山塊が、駱駝の背のやうに起伏して、並である、自分はこの山を、常念とばかり思つてゐたが、一山登つて、路はその横腹、偃松の稀疎になつたところを行く、二の俣の小舎から横尾鳥までは、一時間もかゝり、横尾鳥から常念までは十町ほどの距離に過ぎぬであらうが、急の下りで、急の上りであるから、また一時間を費やす、始終奥常念は面前に屹立して、絶え

奥常念岳の絶嶺に立つ記

す群山を威壓してゐる麓まで来る、前常念岳といふのは、遙かに低く奥常念から岐れて、一支脈を南安曇の平原に向けて派出してゐるが、雲の海が底無しに深く、何も見えない、見えるのは前常念に小さい鬚を擡げてゐる三角測量標ばかりだ。

愈よ奥常念にかゝる麓には偃松で編むた毀れ小舎が傾いてゐる、その邊は平坦な草原で、枕

奥常念岳の絶嶺に立つ記

を伏せた形の石山を、草の中から天に向けて躍りつけた人は、一枚岩の元々とした石山を想像するであらうが、常念岳は大天井岳と同じく、石片の亂次なき堆積である、幾百千枚も積んで、上へ行くだけ瘦削して来る、この山と高さを競ひ得るものは、高瀬川の谷を隔てた穂高山ばかり、群山は皆沈んで了ふ、石片の無器用な継ぎ目を

捕綴するために、偃松や白花の石楠花が、少しづつ
、這つてゐる、偃松の盡きたときは頂に上つた
ときだ、天に近づくときの最後の木は、生物の最
も撃拗に踏み止まつた、最後の健兒で、彼等は自
由に生れて遠慮なく蔓延る、星が隠れると殆ん
ど同時に交代して、青々と活きた姿を見せる一
本として安易に立脚することを肯んせざる靈
木である。

我は、今この高山の頂に立つてゐる、昨日も今
日も霧が下りないから、雷鳥は影も見せない、風
死して動くものもない、身も魂もこの空氣の中
に融けてしまひさうだ、併しいつまで経つても、
融けもしなければ揺ぎもしないものは、穂高と
槍である、無限の時間と空間とに、不朽の身を向
けてゐる一本槍の、槍ヶ岳はこゝから見ると七
八個の鈍頂と一箇の鋭錐とを有して天を刺し

記つ立に嶺絶の岳念常奥

てゐる、或時は月を貫ぬき、或時は雲を截る、槍に
續いて赤岳や祖父ヶ岳が見えるが、その以北は
距離も遠いから、藍色に冷めてゐる、常念は穂高
と直線に睨み合ひ、槍に向つて北東へ近く斜線
を放ち、御嶽や乗鞍岳に向つて南西へと遠く、大
斜線を放射してゐる。

一體蝶ヶ岳たの、鍋冠山だのといふ、二千五百
米突以下の緑鸞葱たる山に名があつて、奥常念

記つ立に嶺絶の岳念常奥

一帯の三千米突を出入する大山脈に、無名の山
が多いのは、下から仰ぎ視られないから、名の命
けやうが無かつたのであらう、彼等は雲の表に
住む、いかむとなれば、常念山脈と槍ヶ岳山脈と
並行してゐて、その東と西は雲で、下界を封鎖し
てゐるにも係はらず、並行線の間、高瀬川溪谷
には、霧一つ下りない、しかして兩山脈の障壁の
外は雲に埋まつて九十度の熱日も之を融解す

記つ立に巖絶の岳念常典

ることが出来ないうまで、固く結むでゐる。
この中で、我が奥常念は、一と際高い、殊に蝶ヶ
岳に向つて低く下つてゐるところは、波の如き
山を躍らすこと七八峰、峰は皆磐石を疊むだも
ので、石は皆裂け、偃松と、岩ぶすまといふ地衣が
布いてゐるばかり、この方面から常念を望むと、
前の婉容はなくなつて、見上げるやうに急峻に
尖つてゐる。

記つ立に巖絶の岳念常典

これらの石は、皆雨に晒され、火に打たれた断
片である、壊敗の形骸である、しかも血を踏まざ
る自然の零落は、未だ死んだこともなければ、朽
ちたこともない、之を荒廢、寂寞、零落と呼べばと
て、誰か彼等より、不死の性を奪ふ権力をか授け
られたる、偉大なるは常念岳である。
常念の頂に佇むだときの自分は、實にかう思
つたのである、自然といふものは、自分の感じた

通りに現はれもし、動くものであると、自然の自由とは、即ち自分の感じ得る自由である、我はこの山脈に分け入つて。昨は月の清光を浴び、けふは雲漫々たる無限を踏む、我といへる一個體、一靈魂、一可燃性の存在を許して我を通過して觀せしむる宇宙は存外小さいものではあるまいか。

どうせ最後は静肅なる自然の中に葬られる

にしても少くとも山上の自分は、ゆゑべ小舎の中で微小なる鼠一疋に恐怖した自分ではなかつた。

流上の川梓

梓川の上流

(二)

明科停車場を下りると、犀川の西に、一列の大
山脈が峙つてゐるのが見える、我々は飛驒山脈
など、小さい名を言はずに、日本アルプスと、こ
ゝを呼んでゐる、この山々には、名の無い、或は名
の知られてゐない高山が多い、地理書の上では
有名になつてゐながら、山がどこに晦かれてゐ



流上の川梓

るのか、今まで解らなかつたのもある——大天
井岳ツツシヤケなどはそれで——人間は十人並じゅうにんなみ以上に、一
寸すんでも頭あたまを出すと、とかく口の端はにかゝる、或は
嫉あやまみの槌つちで、出かけた杭くわが敲たたきのめされるが、こ
の邊へんの山やまは海抜かいぼついづれも一萬有尺いちまんいうしやく、劫初じやくしよの昔むかしが
ら間斷かんだんなく、高壓かうあつりやく力を加くはへられても、大不たいふ畏おその天
柱ちゆうをそゝり立たててゐる。山下さんかの村人むらびとに、山やまの名なを聞き
くと、あれが蝶てふヶ岳たけで、三四月さんしがつのころ雪ゆきが山やまの峽はざま

流上の川梓

に、白蝶の翅を延してゐるやうに消え残るので、さう言ひますといふ。遙に北へ行くと、白馬岳が聳えてゐる、雪の室は花の色の鮮やかな高山植物を秘めて、千島桔梗、千島甘菜、得撫草、色丹草など、帝國極北の地に生える美しくしいのが、錦の如く咲くのもこの山で、雪が白馬の奔る形をあらはすから其名を得たといふことである。白馬岳の又の名を越後方面では大蓮華山といつてゐる。

流上の川梓

る、或人の句に「残雪や御法の不思議蓮華山」とあるからは、これも一朵の白蓮草、品々たる冬の空に、高く翳されて咲きにはほふから、名づけられたのかも知れない。
あはれ、清く、高き、雪の日本アルプス、そのアルプスの一線で、最も天に近い槍ヶ岳、穂高山、常念岳の雪や氷が、森林の中で、新醸る玉の水が、上高地を作つて、こゝが溪流中、色の純美たぐひあり

流上の川梓

ともおぼえない、梓川の上流になつてゐる。
土人はカミウチ、或はカミグチとも呼んでゐるが、今では上高地と書く、高地はおそらく明治になつてからの當字であらう、上も高地も同じ意味を二つ累ねただけで、此地を支配してゐる水や、河といふ意義がない、穂高山麓の宮川の池の邊に穂高神社が祀つてゐる、その縁起に據ると、伊邪那岐命の御兒、大綿津見の生ませたまふ

流上の川梓

穂高見の命が草創の土地で、命は水を治められた御方であるから今でも水の神として祀られて在ます、神孫數代宮居を定められたところから「神垣内」と唱へるとある、綿津見は蒼海のこと、今の安曇郡は蒼海から出たのであらう、自分土地に傳はつてゐる神話と地形から考へて、神河内なる文字を用ひる、高地には純美なるアルプス溪谷の意味は少しもない、河内は天龍川

流上の川梓

の支流和田川の奥を八重河内といふし、金森長
近が天正十六年に拓いた飛驒高原川沿道を河
内路と唱へてゐるから、此地に最もふさはしい
名と考へる。

神河内の在るところは氷柱の如き山づとひ
の日本アルプスの裏で、信濃南安曇郡が北に懸
まつて奥飛驒の稱ある、飛驒吉城郡と隣り合つ
たところで、南には徳本峠——松本から島々の

流上の川梓

谷へ出て、この峠へ上ると、日本アルプスの第一
閃光が始めて旅客の眼に落ちる——と、北は焼
岳の峠、ついでには深山生活の荒男の胸のほむ
らか、硫烟の絶え間ない硫黄岳が聳えてゐる、そ
の間を水に浸された一束の白糸が、亂れたやう
に沮洳の花崗の砂道があつて、これでも飛驒街
道の一つになつてゐる、東には前に言つた穂高
や、槍が岳や、低いのが西に霞澤岳、八右衛門岳が

流上の川梓

立つてゐる、東西は一里に足らず、南北は三里といふ、薬研の底のやうな谷地であるが、今憶ひ出して、も脳神経が盛に顫動をはじめて来る心地のするのは、晶明透徹のその水、自分にあつては聖書にも見えない創造の水、哲人の喉頭にも進まない深思の水、この水を描いて見やう。

(三)

路傍の石の不器用な断片を、七つ八つ並べて

流上の川梓

三四寸の高さと見ず、一萬尺と想つてみたまへ、凸凹もあれば、皺皺もあり、断崖もあつて、自らなる山性を有つてゐる、人間の裳裾に通ふ空気は、この頭上を避けて通るだらう、いかなる山も、その要素では石以上の趣味がない、これは自分の石の哲學であるが、實際神河内溪流も、かやうなところで、四周を包圍して峻立する槍ヶ岳、穂高山、以下、の高山は、奇恠の石の塊といふまで、不

流上の川梓

二山のやうな歴史や、讚美歌を有つてゐない、併し山好きな自分の眼には、只もう日本第一の創造と見える。

生物の絶無な時分のこと、曆に乗らぬ時間を存分寝て、ふと眼を啓くと、肌の温みに氷河の衣がいつか釋けてゐる、亦一瞬間、葛城、金剛、生駒、信貴山などいふ大和河内あたりの同胞が、人間に早く知られる、汚される、天死をしまふ、それ

流上の川梓

を冷たい眼で見て、いつか有らゆる生物が造化の大作の前に俛首て來ることをすら、知らずにもる、知らるゝこと愈よ晚きは、彼等の偉大なる所以である。千年も萬年も、依然として肩から上を雲に、裾から下を水に洗はせてゐる、その下の溪谷は、父の家でない、原始の土である、綿々たる時代の人間の夢が住む、幽寂の谷である、何故かといふに、善光寺街道、木曾街道、糸魚川街道など

流上の川棹

を、往き來ふ昔から今までの旅人が、振り仰いで
見たのは、この奇怪な山々で、追分に立てた路標
の石も、峠の茶屋の婆さまも、天外に高く懸れる
示現は、別に説明のしやうもないから夏も、猶山
は雪が残つてゐるすらあゝと感嘆するくらゐな
ものだ、百人の中に、一人歴史家が來る、名もなき
山よ山の奥にも年代やあると、怪訝な顔して過
ぎてしまつたらう、又一人畫家が來る、山の紫は

流上の川棹

茄子の紫でもない、山の青は天空の青とも違ふ、
秋に殞する病葉の黄にもあらず、多くの山の色
は、大氣で染められる、この山々の色の變化は、全
能の手が秘藏のパレットを空しうして塗つた
山だ、竟に是れ我物ならずと、吐いたことであら
う、宗教家が來る、博物學者が來る、山の黙示、水の
閃めき、人の祈るところ、星の垂るところ、雲の焼
くところ、かしてに自然の關鍵を握れるものあ

流上の川梓

りと羨ましくおもつたらう馬士が通る順禮が
通る農夫が鋤取る手を休めて佇む諸ろの疲れ
煩ひ興奮は皆この無邊際空の大屏風へ來て行
き止まりとなる。想像するがまゝに任せた山感
情を塗りかへした山その山の暗き森と深い谷
過去へと深く行き遠く行くだけ紀念は次第に
成熟する石の上を走つてゐる水の面の経緯は
幾世の人の夢を描いては消し消しては描いて

ゐるのである。

神代ながらの餘ある大天井常念坊蝶が岳の
峰傳ひに下りて來た自分は今神河内の隅に佇
んだ。

流上の川梓

鼻の先には穂高山が削り立つてゐる水の平
らに走る波動に對して直角に嚴かつい肩を聳
やしてゐるその胸毛の底に白い薬を點じたの
は雪であるアルプス一帯に雪の降るのはそれ

流上の川梓

は早いもので、九月の末には、白くなる程つもらぬまでも、氷の毛のやうなのが石角を弾き初める、來年の七八月まで消えない、最も北へ行くほど深く、その雪田も大きくなるが、穂高山などは、傾斜が急なものと、外氣に曝されてゐるので、雪は蓮華山ほどには無い、紫黑色の大岩が、脚下に吼へる水に脚を洗はせて、このみは冬の雪壁動くかと思つて見るとき、自然の活動元素は、水に集中

流上の川梓

されてゐるやうだ、水は氷雪の結象から、流通大自在の性を享け、新たなる生命を賦與せられたもの、特權として、盛んに奔放する。低さには森あり、林あり、野の花あり、しかし高きには雪あり、氷あり、我等の不二山は、小さい山だが、熱帶地方の二倍も高い山より偉大なるは、雪と氷に包まれてゐるためである。穂高といはず、槍ヶ岳といはず、奥常念、大天井に至るまで、萬古の雪は蒸

流上の川梓

發しない下層から解ける雪だ、死の如く静肅に、珠の如く淨美な雪から解けた水の純粹性の縁を有することは、言ふまでもない。

神河内に流れ落ちる水の脈が、およそどれほどあるであらう、自分は隅々隈なく、跋渉したわけでは無いが、自分の下りて来た穂高山の前の短澤を始めとして、槍ヶ岳の麓の徳澤、槍澤、横尾谷、それから一ノ俣、二ノ俣、赤岩小舎の傍の赤澤

流上の川梓

引きかへして霞澤山から押し出す黒澤といふのは、炭質を含む粘板岩が、石版を碎いたやうに粉になつてゐるもの。白澤は之に反して、白く光る石英粒の砂岩である、その他名の無い澤を合せたら幾十筋あるかも知れぬが、それが絡み合つて、本流になるのが梓川だ、その本流といふのが、幅潤の二筋三筋に別れ、川と川との間には、花崗の白い砂の平地と、この平地にみどりの黒

流上の川梓

髪を梳る處女の森とで、水は盲目的に蛇行して、
森と森との間を迂回する、或は森を突き切つて、
向ふの平地へ驀地に走る、森は孤立した小島に
なる、水楊が川の畔にちよんぼりと、その蒼い灰
のやうな、水銀白を柔らかに布いた薄葉を微風
にうら反へしてゐる、たまに白砂の中に鹽釜菊
が、赤紫色に咲いてゐるのが、鮮やかに眼に映る
外は、青い空と、緑りの木と、碧の水、

流上の川梓

しかしてどこから見ても、神河内を統御する
大帝は、穂高岳で、海拔五千七百尺の神河内から、
聳ゆること更に五千尺に近く、梓の濶流も、支線
の小峽流も、その間の幾十反の點々たる平地も、
何もかも一切包まれた谷は、神つ代の穂高の命
の知ろし召す世界である。
蝶ヶ岳から、短澤へ下りて来た自分は、先づこ
の清い流れに嗽ぎもし、頭も洗ひ、顔も拭いた、氣

流上の川梓

が遠くなるやうな悪臭の蕪草を掻き分けたこ
とや、自分の肩から上を氣圈のやうに、繞つて
ゐた、蚬の幾十陣團やに、窒息するかと苦んだこ
とも夢の谷へ下りては、夢のやうに消えて、水音
は清々しい。

川は浅く、底は髪の毛一筋も見え透く雪解水
であるが、碧きはまつて何でも、この色で消化し
てしまふ、水底の石は槍ヶ嶽の刃の翻れた石英

流上の川梓

斑岩蝶が岳から押し流された葉片状の雲母片
麻岩石そのものが、流水波浪の細い線を有つて、
しかもレンズのやうに透明である、片麻岩系の
最大露出、赤石山系にも見たことのない美しくし
さである、瞬いたのは、夕の星の沈んだのか、光つ
てゐるのは、螢が泳いだのか、青いのは、燐が燃え
てゐるのか、白いは水仙の莖の流るゝか、静か
なときは水が玻璃に結晶したかの如く、動ける

流上の川岸

ときや、流紋岩、蛇紋岩が鍋で煮られて、シタ
の液汗に溶かされたやうで、石を噛むで泡立つ
とき、玉霰飛び、綿花投げられ、氷の断片流動し、岩
石に支へられて渦や、逆流を生じ、畝の寄せては
返へすとき、一萬尺の分身なる石と、萬古の雪の
後身なる水とは、天外の故郷を去つて、他界にう
つるのだからと、抱き合つたり、跳り上つたりし
て、歡樂と榮華をさばめてゐる。この狭い、浅い、谿

流上の川岸

谷も、穂高の大岳眉を壓して、荒海の氣魄先づ動
くのである。
川の兩岸——といつても堤を築いた林道を
除く外は、殆ど水と平行してゐる——には、森林
がある、樅、梅、白檜など、徳本峠からかけて、神河内
高原を包み、槍ヶ岳の横尾谷、赤澤に至るまで、み
んな處女の森を作つてゐる、最も幾抱へもある
やうな大木は見えなかつたが、水を涉つて森に

流上の川梓

入ると、樅の皮は白い苔の衣を被いでゐる、淡褐色となつて鱗のやうに脱落したのもある、風に撓められて「出」字状に臂を張つた枝は、屈めた頭さへ、推参者めがと叱るやうに突き退ける、梅の黒色の幹が朽ちて水の中に浸つてゐる、大方紫桤に變性するだらうと思はれる、さすがに寒いと思へて、唐檜は葉の裏を白い蠟で塗つてゐるのが、遠くからは藍色をして、天空の青、流水の碧

流上の川梓

と反映してゐる、かやうな森林も、路といふ路はなく、根曲り竹がふさがつてゐるから、掻き分けて行く。
森が盡きる、又水を渉る、水は偏つて深く、偏つて浅い、右から左へと横切るのに、是非深いところを一度は通る、木の葉のやうに、脈もなく纖維もないのに、氣孔に幾億萬の綠素があつて、かくは青いのかと、足を入れながら底を見る、水に沈

流上の川粹

めるは、白い石も青く、水面より露はれたるは、黒胡麻の花崗石も銷磨して、白堊のやうに平つた。く晒されてゐる、しぶきのかゝるところ、洗はれない物も無く、水の音は空気に激震を起して、崖に反響し、森を揺すつてゐる、その光波の振動が、烈しく眼を掠めるので、あまり見惚れると、眩暈がして後髪を引き倒されさうになる、それよりも堪まらないのは、水が冷たくて、足が焼き切れ

流上の川粹

るかとおもはれることで、足が呼吸を止められて喘ぐのが透いて見える。
やうやく川を渉る、足袋底が、こそばゆいから、草鞋を釋いで足袋を振ふと、粗製のザラメ砂糖のやうな、花崗の砂が、雫と共に墮ちる、このやうな川渉りを、幾回もさせられるのである。

流上の川梓

穂高山の前面に来る。
河原を切れて處女の森の一つに入る、白檜の
森は、水のやうな虚空を突き、空のやうな水の面
を伺ひ、等深線の如く横さに走つてゐる、森の中
の瀝青のやうな、立すんだ水溜りは、川流が變つ
て、孤り残された上へ、此頃の雨で滌となつたの
であらう、その周囲には、緑の匂ひのする、微の生
えた泥土があつて、踝まで吸ひこまれる、諸君は

流上の川梓

深山の沼林の寂寥を味ひたることありや、何年
かの落葉(七葉樹)だの、桂だの、澤栗だの、肉が消
えて網のやうな纖維ばかり残り、それも形がお
ぼろになつて、この沼の中に月の光を浴び、甘き
露を舐めた執念が残つてゐる、落葉、落葉、又落葉、
生々しい青葉は、無色になり、輪廓ばかりの原畫
になつて、年々無數に容赦なく振ひ落される、い
つか冬の野原で、風もない、微とも動かぬ檜林の

流上の川梓

中で、梢にこびりついてゐる残葉の或一枚だけが、ブルブル震へてゐるのがあつた、同じ梢に並んでゐる葉が、皆沈黙してゐるのに、此葉だけは、烈しく慄へてゐる、無論蟲一疋もないのだ、末期に迫つた廢葉の喘ぎは、烈しかつた、沼の中にも苦痛の呼吸を引いた自然の虐殺、歡喜のどよみを擧げる自然の復活は、行はれてゐる。
この邊になると、森の中に幾筋かの路が出来

流下の川梓

てゐる、放された牛馬どもは、無慮五百頭は居やう、六月下旬植ゑつけが済むで、農家が閑になると、十月上旬頃まで、こゝへ放し飼にするのだ、彼等は縦に行き、横にさまよひ、森の中の木々に大濤の渦を捲いて、ガサト、ひどい音をさせる、遠くから見ると、大蛇が爬つてゐるのかとおもふ、かくて青々と心まで澄んだ水の傍まで来ては、絶望の流人のやうに悄然と引きかへす、又来て

流上の川梓

は引きかへす、引きかへしては又來る。
宮川のこ小舎へ、辿り着いた、老獵士嘉門次がゐ
るので、嘉門次かもんじの小舎とも呼ばれる、主人は岩魚
でも釣りに往つたかして、戸が閉つてゐる、小舎
の近傍には、反魂草はんこんそうの黄い花が盛りだ、日光から
温かい光だけを分析し、吸収して、咲いてゐるや
うな花だ、さつきの沼の傍で、冷たさうに咲いて
ゐた菖蒲と比べで、箇の性の微妙なる働きをお

流上の川梓

もふ、小舎こやの後は牛馬ぎうばの襲はないやうに、木垣
が結んである、梓川しりがはへ分派する清い水が、直ぐ傍
を流れてゐる、鍋や飯櫃も、こゝで洗ふと見えて、
飯粒が沈んでゐる、獵犬が胡亂くさい眼で、自分
たちを見たが、却て人懐つかしいのか、吠へさう
にもしない、一體この神河内には、一里も先にあ
る温泉宿を除いて、小舎が二戸ある、一つは徳本
峠を下りると、直ぐの小舎で、二間四方の北向き

流上の川梓

に出来てゐる、徳本の小舎といふのがそれで、放し飼いの牛馬を一頭幾錢といふ、安い賃金で、監督する男が住んでゐる、川を涉つて七八町も行く、この宮川の小舎へ出ると、こゝは自分に憶ひ出の多い小舎である、六年のむかし、槍ヶ岳へ上る前夜、この小舎へ山林局の役人と合宿したとき、かういふ話を聞いたからで。

流上の川梓

飛驒の豪族、姉小路大納言良頼の子、自綱と聞えしは、飛驒一國を切り従へて、威勢並ものとなかつたに、天正十三年、豊臣氏の臣、金森長近に攻められ、自綱は降人に出た、その子、秀綱は健氣にも、敵人に面縛するを肯んせず、夫人や、姫や、侍婢、近侍と共に、出奔した、野麥峠を越えて、信州島々谷にかゝつたころは、一族主、從離れ、一になり、秀綱、卿が波多へ出やうとするところを、村の

流上の川梓

人々に落人と見られて取り圍まれ主従こゝで討死をした、姫は父を失ひ、母にはぐれ、山路に行き暮れて、惱んでゐるのを、通りがりの柚人が案内を承はると伴はり、姫を檜に縛しめ、路銀を奪つて去つた、やゝありて、姫は縛を解き、鏡を木の枝にかけていふことに、鏡は女子の魂ぞ、一念宿どりてつらかりし人々に、思ひをかへさでやと、谷底に躍り入つて水屑となる、かの柚人途に

流上の川梓

て、姫の衣も剥ぐべかりけりとほくそゑみて木の下に戻れば、姫はあらで鏡のみ懸かれる、男ふと見れば、鏡のおもてに、冷艶雪の顔して、恨の眼星の如く、はつたと睨むに、男頼に死んでけり、病める夫人は谷間へ下り立ち、糧にとて携へたる梨の實を土にうづめ、一念木となりて臨終の土に生ひなむ、わが夫の御運ひらかずば、永へに美さ果を結ぶことなかるべしと、終に敢へなくな

流上の川梓

りたまふ、その梨の木は、亭々として今も谿間に
あれど、果は皮が厚く、澁くて喰はれたものでな
い、秀綱卿の怨念この世に残つて、仇をした族は
皆癩病になつて悶き死に、死んだゝめ、島々には
今も姫の宮だの、梨の木だのと、遺跡を祀つてあ
るといふ、

圍爐裏に櫓をさしくべ、岩魚の串刺にしたや
つを炙りながら、山林吏が、さつき捨てた土饅頭

流上の川梓

は何だね、と案内の獵師に訊ねる、旦那、ありや飛
驒の御大名の墳で、と右の一伍一什をうる覺え
のまゝに話す、役人は、そんな由緒のあるものと
知つたら、何とか方法もあつたものをと、口惜し
さうな顔をした。林道開拓のため、途に當つた古
墳は、破毀されたのである。もう今こゝろは石の碎
片、一ツ無からう、假令あつても、それが墳墓であ
つたことを、姉小路卿なる國司の在りし世を忍

流上の川梓

ばせる石であつたことを、誰が知らう、月の世界に空気がなく、日本アルプスに人間もなければ、時代もないと思つてゐた自分は、この悲壯な、クラシツクな話に、どんなに動かされたであらう、事業が消えて名が残る、名が消えて石が残る、せめて石さへ存在すれば、誰かの何かであるぐらゐな手繰りにはなる、人の唇より酬はれた語に曰く、「こんな邪魔なもの抛り出せ」これで一切の結

流上の川梓

宮川の池

明神岳の名を負うてゐる、穂高岳の下にある

未がついた時代は天正から明治まで、垂直に下る、雲の中から覗いてゐる萬山は、例の如く冷たい。

嘉門次が歸りさうにもないので、小舎から二三町も行く、鳥居があつて四尺ばかりの祠を見せる、穂高神社の奥の院だといふ、笹を分けると

流上の川梓

から、明神の池ともいふ、一ノ池、二ノ池、三ノ池と、
三つの明珠をつないでゐる、一ノ池から順に、上
の池中の池、下の池ともいふ、一ノ池が一番大き
くて、二ノ池が之に次ぐ。

青色光の強い水が、濃厚に嵩を持つて、延板の
やうに平たく澄んでゐる、大岳の影が萬斤の重
さで壓す、あまり静で、心臓形の桔梗の大瓣を、象
徴したやうだ、壓すほど水は愈よ静まりかへつ

流上の川梓

て爪ほどの凸面も立てない、山が厳格な沈黙を
保てば、水も肅然として唇を結むでゐる、千年も
萬年も、この山とこの池とは二重に反對した暗
示を有つた容貌を上下に向け合つてゐる、春の
雪が解けて、池に小波立つときだけ艶やかに莞
爾する、秋の葉が髪の毛の脱けるやうに落ち出
すともう真面目になる、猶見惚れる。

この狭い谷の中の、小さい池は、我等の全宇宙

流上の川岸

である、過去の空間に立つ山と、未来に向つて走る川との間に、介まつて、池は永へに無言である、自分たち二人(自分は嚮導兼荷擔ぎの若い男を伴つてゐる)だけが確に現在である、我等は阻はれてゐるのでは無いかとおもふ、不安を感じないわけにはゆかない、見よ、緑の一色を除いて、生けるもの、影としては何もない、禽も啼かないから肉聲も聽かない。

流上の川岸

白芥子の花のやうな日光がちらり落ちる、飛白を水のおもてに織る、岩魚が寂寞を破つて飛ぶ、それも瞬時に、青貝摺の水平面にかへる、水面から底まではおそらく、二三尺位の深さであらうが、穂高岳を疊むで、延ばしたり、縮めたり、自在にする、水の底に白く透いて見えるのは、石英が沈んでゐるのだ。
二の池の方に廻る、池には石が座榻のやうに

流上の川梓

不規則に、水面に點じてゐる、岸には淡紅の石楠
花が水に匂ふ、蛇紋が搔き破られて、又岩魚が飛
ぶ、石楠花の雫を吸つてゐる魚だから、腸まで芳
芬に染まつてゐないかとおもふ。

三ノ池は一ノ池の半分ほどしか無いが、木が
茂つて松蘿が、どの枝からも腐つた錨綱のやう
にぶら下つてゐる、こればかりではない、葛、山紫
藤、山葡萄などの蔓は、木々の裾から纏繞いて翠

の葉を母木の胸に翳し、いつまでもこゝにゐて
と言はぬばかりに取り纏つてゐる。
夕暮になると、件の松蘿や、蔓は大蜘蛛の巢に
化けて、をだまきの絲の中に、自分たちを葬るに
違ひない。

(四)

流上の川梓

その夜は、上高地温泉に泊つた、六年前に來た
ときは、温泉は川の縁に湧いてゐて八十年前と

流上の川梓

かに建てた破れ小舎があるばかり、落葉は沈む、蛇の脱殻が屋根からブラ下る、獵士ですら浴を、澡らなかつたものだが、今は立派な温泉宿が出、来た、それにしても客の来るのは、夏から秋だけで、冬は雪が二尺もつもる、風が勁くて、山々谷々から吹き颯げ、吹き下すので、砂丘のやうなものが方々に出来る、温泉の人々は宿を閉し、番人一人残して里へ下りてしまふさうである、宿は二

流上の川梓

階建ての壁も塗らない、白木造りで、天椽もない、未だ新らしくて木の匂ひがする、これで室が分けて無かつたら、神樂堂だ。何といふ茸が知らぬが、饅頭笠の大きさほどのを採つて来て、三度の飯に味噌汁として出されたのには閉口した、宿屋界隈に多いのは、落で大きいのは五六尺の丈に達する、飛驒の蒲田から焼岳を越して来る人も、島々から徳本峠を越

流上の川梓

して来る人もこの宿で落ち合ふが、荷物に露の五六莖を括りつけてゐないのは無い、獵士の山歸へりの苞にも、岩魚を漁る仄の中にも露が入れてある、同じく饗膳に上つたことは、言ふまでもない。

翌くる日は穂高岳に上るつもりで、朝夙く起きた、宿の女が飯が出来やしたから、圍爐裏の傍でやつて下せえ、いけましねえかと、畏るゝ闕

流上の川梓

越しに伺ひに来る、いゝとも、と返辭して大圍爐裏の前に、蠟燭を立て、獵士や宿の人たちと、車座になつて飯を済ます、準備も整つて出かけると、雨になつた。

宿の前には、梓川の寒流が走つてゐる、この川は、北から出て、西へと迂回し、槍ヶ岳、穂高山、焼岳等の下を蜿蜒り、四山環峙の中を南の方、島々に出て、又北に向いて走るの、アルプス山圈を半

流上の川梓

周することになる川を隔てた八右衛岳は、霧雨の中から輪廓だけをあらはす、淡い水に、濃い水で虚線を描いたやうだ、頑童が薄墨で無遠慮に線を引くと、こんなのが出来る、しばらくして、虚線が消えると、兀岩削るが如き石の峰が、峻立する、柔い線を出せば出せるものかなとおもふ。川に沿いて行く、この國特有の信濃撫子(實は甲州にもある)が、真紅に咲いてゐる、河原に咲く

流上の川梓

ことが多いので、河原撫子と、土地の人はいふやうだ、森と川の間、一筋道が通じてゐる、本流に「へ」の字をや、平にしたやうな橋が架つてゐる、取りつきに杭を組んでゐるのは、牛馬の向岸へ渡るのを拒ぐためだ、横の棒を一本外して、人は出入をする、橋の半に佇んで振り仰ぐと、焼岳の頭は霧で見えなかつたが、巨人がこの川を跨いでゐる態がある。

流上の川梓

橋下の水は、至つて青く、且つ深い、毎朝々々、仙人が上流の方で、幾桶かの藍を流してゐるに違ひない、深いところは翡翠色に青く、浅いところも玉蟲色に、雨光りがしてゐる、川に産まれた岩魚は、水の垢から化して、死ぬると溶けて、素の水に歸るかとおもふまでに、水底に動かないでゐる、人影がさしたりすると、ついと遁げる、さすがに水の中で水が動いたのでも無いことだけが

流上の川梓

解る。

本道から折れて森の中に突き入る、この邊は草原で、野薊、螢袋、山鳥胄などが咲いてゐる、幅の狭い川、廣い川を二つ三つ徒渉して、穂高山の麓の嶽川まで來ると、雨が強くなつた、登山をあきらめて引きかへすころは、濡鼠になつて了ふ、獵士は山刀を抜いて、白樺の幹の皮を、上に一刀、下に一刀傷け、右と左の兩脇を截ち割つて、グイと

流上の川梓

剥くと、前垂懸け大の長方形に剥げる、頸の背骨に當るところを彎形に切り抜いて、自分の肩にかけてくれた、樺の皮で一枚合羽が出来たのはよいが、その皮には苔も粘つてゐる、蘭科植物も生えてゐたから後からは老木の精霊が、森の中を彷徨つてゐるやうに見えるたらう、雨は小止みになる。

蒼黒い森を穿つて、梓川の支流嶽川は、鎌を研

流上の川梓

ぐやうに流れる、水の陰になつたところは、黒水晶の色で、岸に近いところは浮氷のやうな泡が、白く立つてゐる、初めは水が流れてゐる、後には水が水の中を駈け抜けながら、人の足を切る、森には大石が多い、どの石も、どの石も、苔が多い、苔の尖つた先には、一粒づゝの露の玉を宿してゐる、暗鬱な森の重々しい空気が、白樺の性根の失せて脆い枝や、柔嫩な手で人の脛を撫でる、濕つ

流上の川梓

た薇や、苔や、古い落葉の泉なす液汁や、シメク
する草花の絨氈やそんなものがひちやくちやく
に掻き廻されて、緑の香が強い、この香に觸れる
と、雪の日本アルプスといふ感じが、胸に閃めく。
今度はまた川になる、川の面は、呼吸も吐かず
静まりかへつてゐるやうに見えるが、足を入れ
ると、それこそ疾風が液體になつたやうに全速
力で走つてゐる、流れの浅く、灣入した、緩やかな

流上の川梓

ところろに、背を露はした石がある、苔が厚く活物の
の緑が蠢めいてゐる、水草の動くのは、髪の毛が
ビシ／＼と流電に逆立つやうだ。
水の流れに、一羽のオツネン蝶が来た、水の上
を右に左にひらりと舞ふ、水はうす紫の菫色蝶
は、黄花の菫色重瓣の菫が一つに合したかとお
もふと、蝶は水を切つてついと飛ぶ、水は遠慮な
く流れる、蝶も悠々と舞ふ、人間の眼からは、荒砥

流上の川梓

のやうな急湍も透徹して水底の石は、眼玉のやうなものもあり、松脂の塊まつたのも沈み、瑤瑤質に光るのもある、蝶は水を見ないで石のみを見た、石を見ないで黄羽の美しくしい我影を見た、影と知らずに雌と見たか雄と見たか、或は水の玻璃層は人間には、延板のやうに見えても、蝶には何でもないのか、虚空の童女は、つと水底の自分を捉へやうとして、飛びつくと倏ち渦まき水に

流上の川梓

捉へられた一二間流されながらも濡れ羽を震つて悶へた、それでも反動で二三尺空へ颯つた、助かつたと胸を撫で下して見て居るうちに、又飛び込んだ、今度も必死になつて羽を顛はしたが、水は苦もなく捲き込んで、遠慮なく流れて行く、澄ました顔で流れてゐる。

雲表終

鳥水生著述目錄

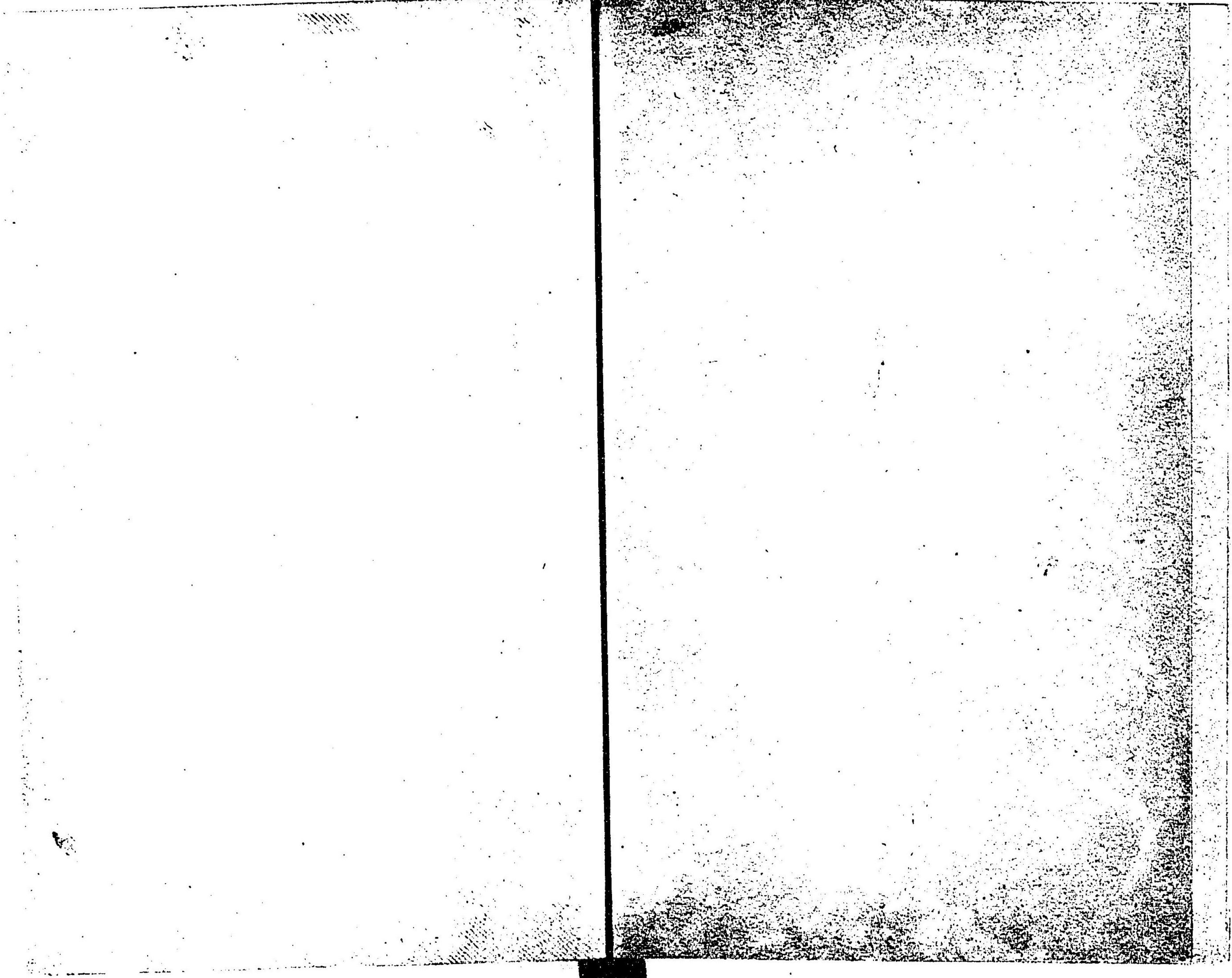
不二山 第五版 如山堂發行

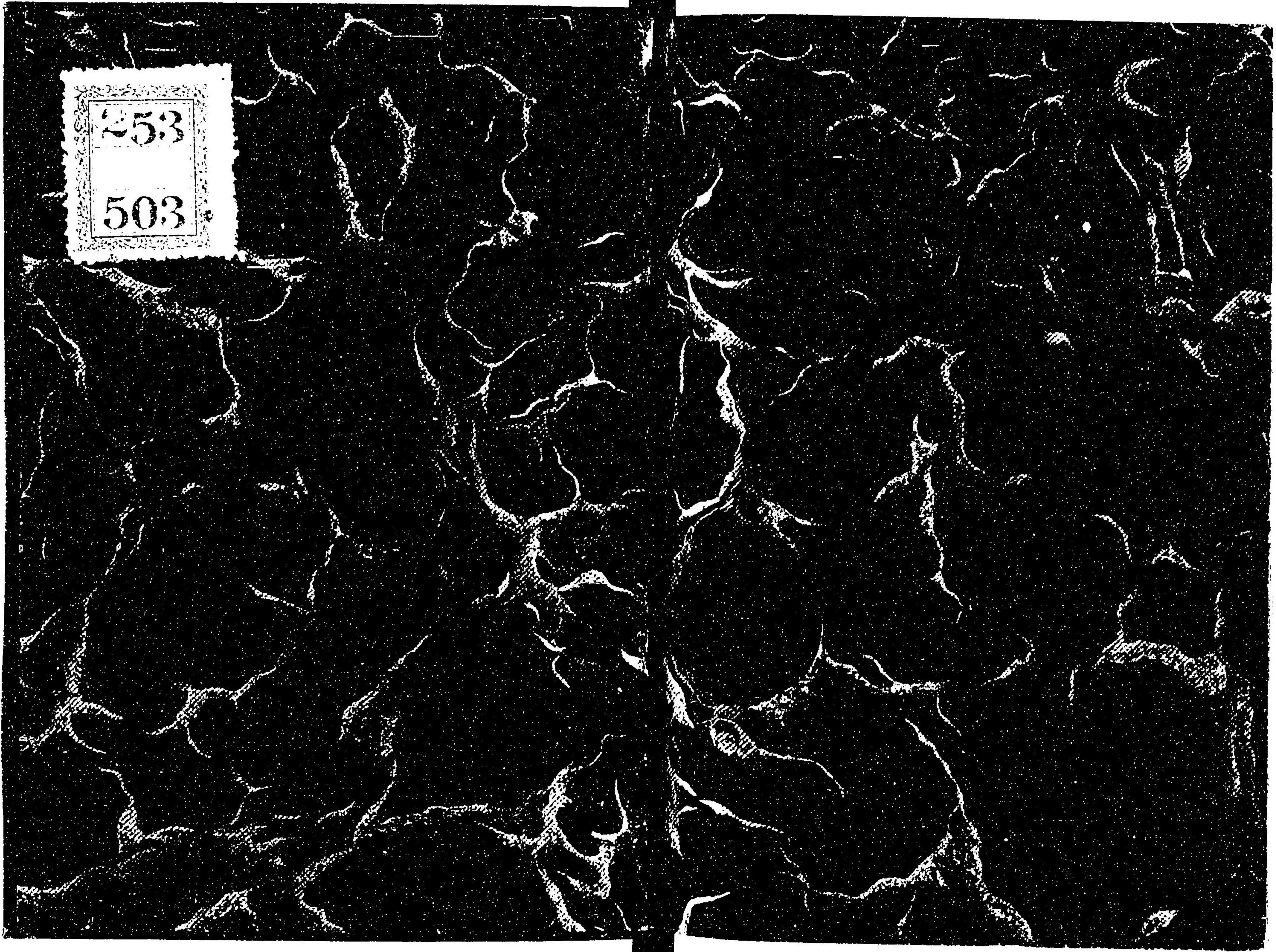
日本山水論 第三版 隆文館發行

山水無盡藏 同上

鳥水文集 本郷書院發行

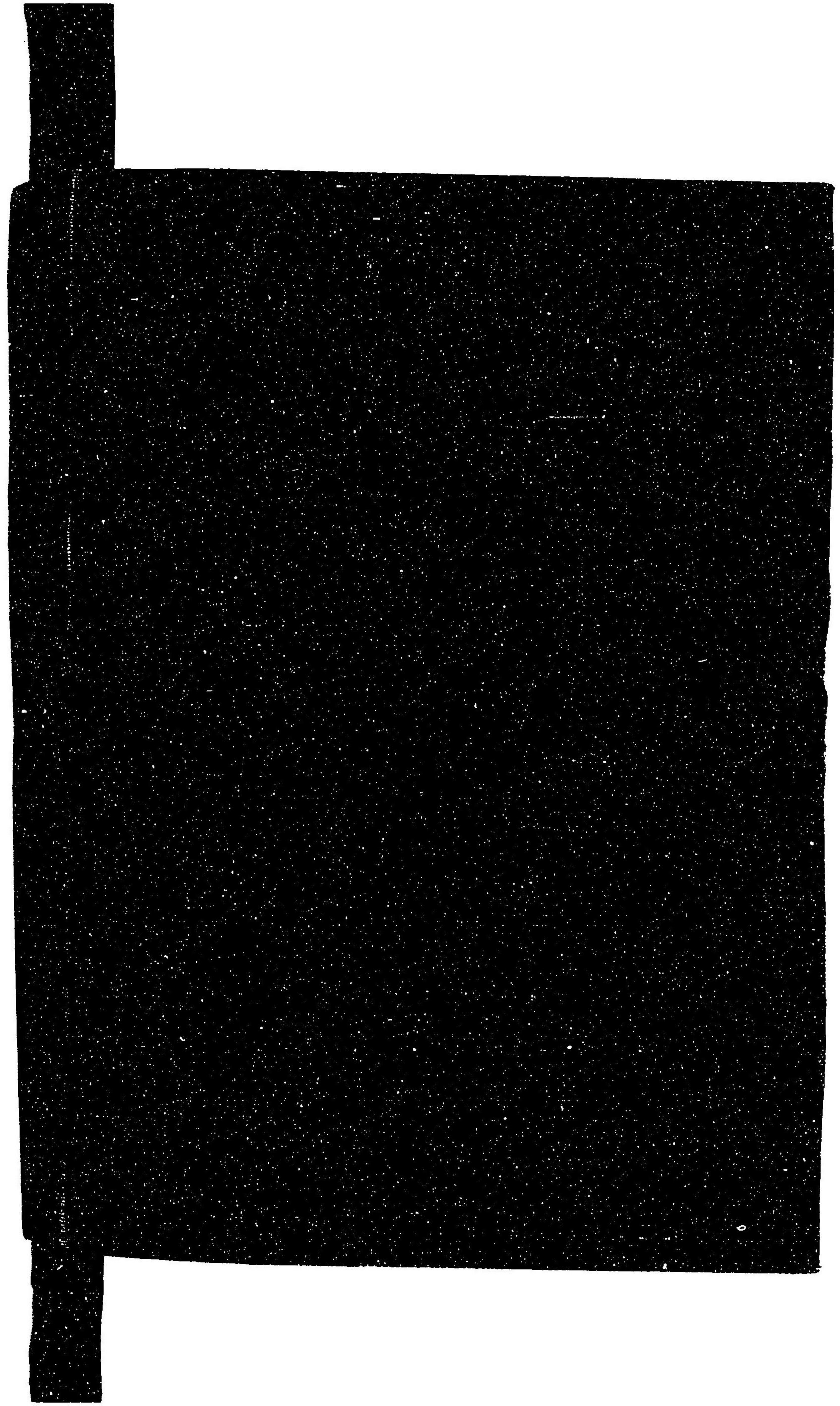
<p>明治十四年七月十一日印刷 明治十四年七月十日發行</p>	
<p>著作者 小島 鳥水 <small>東京府下荏原郡品川町 利田新地六番地</small></p>	<p>發行者 戶田直秀</p>
<p>發行所 東京市京橋區木挽町四丁目 左久良書房</p>	
<p>印刷者 東京市京橋區弓町二十四番地 高塚慶次</p>	<p>印刷所 東京市京橋區弓町二十四番地 三協印刷株式會社</p>
<p>一郵 冊稅 金八錢</p>	<p>八拾 錢</p>





533

503





022388-000-6

特61-505

雲表

小島 烏水／著

M40

ADB-0010



